

# 看護学生の「看護」に対する認識の変化(第1報)

関谷 由香里, 酒井 淳子, 青木 光子  
岡田 ルリ子, 徳永 なみじ, 岡部 喜代子

愛媛県立医療技術大学紀要 第2巻 第1号抜刷

2005年12月

## 看護学生の「看護」に対する認識の変化(第1報)

関 谷 由香里\*, 酒 井 淳 子\*, 青 木 光 子\*  
岡 田 ルリ子\*, 徳 永 なみじ\*, 岡 部 喜代子\*

### Changes in the Awareness of the Nursing among the Student Nurses(I)

Yukari SEKIYA, Junko SAKAI, Mitsuko AOKI  
Ruriko OKADA, Namiji TOKUNAGA, Kiyoko OKABE

#### 序 文

看護基礎教育において、看護学生が看護学を学ぶ成果として、「看護」に対する、看護の専門家をめざすものとしての独自の認識をもつことは、看護基礎教育の眼目であるといっても過言ではない。それは、看護基礎教育の領域において、その重要性を反映するかのよう、看護学生の「看護に対する認識」や、それと同義の「看護観」「看護認知」「看護に対するイメージ」「看護の概念」に関する多くの研究・報告がなされていることをみても明らかである<sup>(脚1)</sup>。

先行研究の傾向としては、短大看護学生の各年次の「看護認知」を比較したもの<sup>1)</sup>、同じく、短大看護学生の入学時と卒業時の「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージを比較したもの<sup>2)</sup>、看護学生の「看護概念」やその形成過程に関するもの<sup>3)4)</sup>に類するものが多くみられた。また、臨地実習を一つの「看護に対する認識」を進展させる要因と捉えた研究もなされていた<sup>5)6)</sup>。しかし、これらの報告は、一部を除けば<sup>(脚2)</sup>、カリキュラムの進捗に沿った縦断的調査を行ったものではなかった。さらに、各研究では、「看護に対する認識」と「看護観」「看護認知」「看護に対するイメージ」「看護の概念」等の用語が同義で用いられており、用語規定が判然としていないという傾向がみられた。

そこで、この度、「看護に対する認識」の用語規定を行った上で、E大学の看護学生の4年間の「看護に対する認識」の実態とその変化について把握すること、その結果をE大学のカリキュラム検討の一資料とすることを目的に、E大学のカリキュラムの進捗に沿って、看護学生の「看護に対する認識」に関する質問紙調査を行い、内容分析を行うこととした。本稿では、平成17年度の入学を対象に行った、入学時の調査・分析結果について報告する。

#### 研究目的

E大学の看護学生の「看護」に対する認識の実態を把握する。また、その結果をE大学のカリキュラムを検討する際の基礎資料とする。

#### 研究方法

1. 研究対象：E大学看護学科平成17年度入学生60名

2. 研究期間：平成17年4月～平成21年3月  
〈質問紙による認識調査の期間〉

カリキュラムに沿った看護に対する認識に関する質問紙調査の期間については、前田ら<sup>7)</sup>の報告を参考に、看護学生の看護に対する認識の発展に最も関与している臨地実習の前後に入学・卒業時を加えて、以下の通り設定した。

- ① 平成17年4月11日～4月18日：入学時
- ② 平成17年8月9日～8月12日：基礎看護学実習  
I—A終了直後
- ③ 平成18年3月3日～3月7日：基礎看護学実習  
I—B終了直後
- ④ 平成19年3月16日～3月20日：基礎看護学実習  
II終了直後
- ⑤ 平成19年8月前期試験終了後：各看護学実習前
- ⑥ 平成20年3月：各看護学実習3クール終了後
- ⑦ 平成20年8月：全看護学実習終了後
- ⑧ 平成21年3月：本学卒業直前

3. 研究方法

1) 自記式質問紙調査法(留め置き法)

質問紙は、相原らの先行研究<sup>8)</sup>と看護学概論のテキスト<sup>9)10)</sup>を検討した結果、看護に対する認識を形

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

成する上で欠かすことができない、「看護」に関する知識として以下の項目を設定した。それは、「看護」の目的、「看護」の対象、「看護」の役割/機能、「看護」に必要な技術、「看護」の専門職としての能力向上に必要な取り組み、「看護」の対象との人間関係形成に必要な要因、「看護」が行われる場についての7項目である。質問紙は資料1を参照されたい。

2) 研究デザイン：質的研究デザイン

4. 分析方法と概念枠組み

1) 分析方法

分析方法は内容分析<sup>11)</sup>で基本的分析単位は文とする。カテゴリーの細分化と特定シンボル(語)<sup>(脚3)</sup>の対応表は相原らの先行研究<sup>8)</sup>と看護学概論のテキスト<sup>9)10)</sup>を参考に作成した。表1を参照されたい。

資料1

看護研究：「看護」に対する看護学生の認識の変化	
看護学科1年生 2005/4/11~4/18	
質問紙調査用紙	
以下の言葉や文章について、あなたが知っていること、考えること、イメージすることを、あなたが思いつきがりに自由にお書きください。	
1. 看護は何をめざして行うと思いますか。	5. 自分の、看護職としての能力を高めるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。
2. 看護の対象となる人達はどのような人達だと思いますか。	6. 看護の対象とより良い人間関係を作るためにはどのようなことが重要だと思いますか。
3. 看護職はどのような仕事をすると思いますか。	7. 看護は、社会のどのような場所で行われると思いますか。
4. 看護に必要な技術には、どのようなものがあると思いますか。	
ご協力、ありがとうございました。 (実寸はA3用紙1枚)	

表1 カテゴリーの細分化と特定シンボルの対応表

カテゴリー	サブカテゴリー	特 定 シ ン ボ ル
1 看護の目的	健康に関するニーズの充足	健康の回復・維持・増進, 疾病の予防 生活の質の回復: もとの生き方に戻る, 健康快適な生活, 社会復帰 対象の幸福, 安らかな死への援助, 苦痛の緩和
2 看護の対象	すべての人々	身体的・精神的に問題を抱えている人: 病気を抱えている人(病気の人), 病気になりそうな人 援助を必要とする人: 健康を願う人, 家族が援助を望む人, 生活に支障がある人, 対象の家族 健康な人, 地域の人
3 看護の役割・機能	身体的援助 → 精神的援助 → 教育・指導 → 物理的・化学的・社会的環境調整	排泄のケア, 清潔のケア, 環境調整, 身体の状態の把握 思いやり, 心のケア, 心の状態の把握, 観察, 励ます, 認める, 支援する 対象の自立のための知識・技能の伝達, 療養上のアドバイス 医師や医療関係者との連携, 家族への配慮
4 看護に必要な技術	コミュニケーション技術 日常生活援助技術 診療に伴う援助技術(観察・測定技術) 教育・指導技術	*具体的な技術項目が該当する。
5 看護専門職としての自己成長	看護専門職としての知識 → 看護専門職としての技術 → 人間性 → 経験 →	勉強して専門的な知識を得る 実践的な技術を身につける, 正確な技術を身につける 社会的な視野を広げる 経験をつむ, 経験に対する積極的な姿勢
6 看護の対象との人間関係	対象の尊重 対象の理解 相互交流	個人として尊重する 対象のことをよく知る, 対象を理解しようと努力する, 対象の立場への変換 良い聞き手になる, 対象の思いの表出を促すように関わる, 話す機会を多くもつ
7 看護実践の場	対象がいる場 社会のあらゆる場所	自宅・家庭, 病院, 学校, 老人保健施設, 保健所, 養護施設, 障害者施設 地域, 会社

2) 概念枠組み

ここでいう「看護」に対する認識とは、前述の質問紙でたずねた7項目の知識について、看護学生が臨地実習を含む個々の学習過程で理解し、統合して知りえた事柄を指す。「看護」に対する認識の発展段階としては「看護」について自らの言葉で表現で

きることを一つの基準とした。

本研究では、庄司<sup>12)</sup>戸坂<sup>13)</sup>の論を参考に、認識の発展に関する概念枠組みを提示した(図1)。横軸を時間とし、縦軸を認識の発展段階とした。認識の発展は漸進的であることを反転した矢印で示し、認識の発展を示す三段階の説明を各矢印に付した。また、

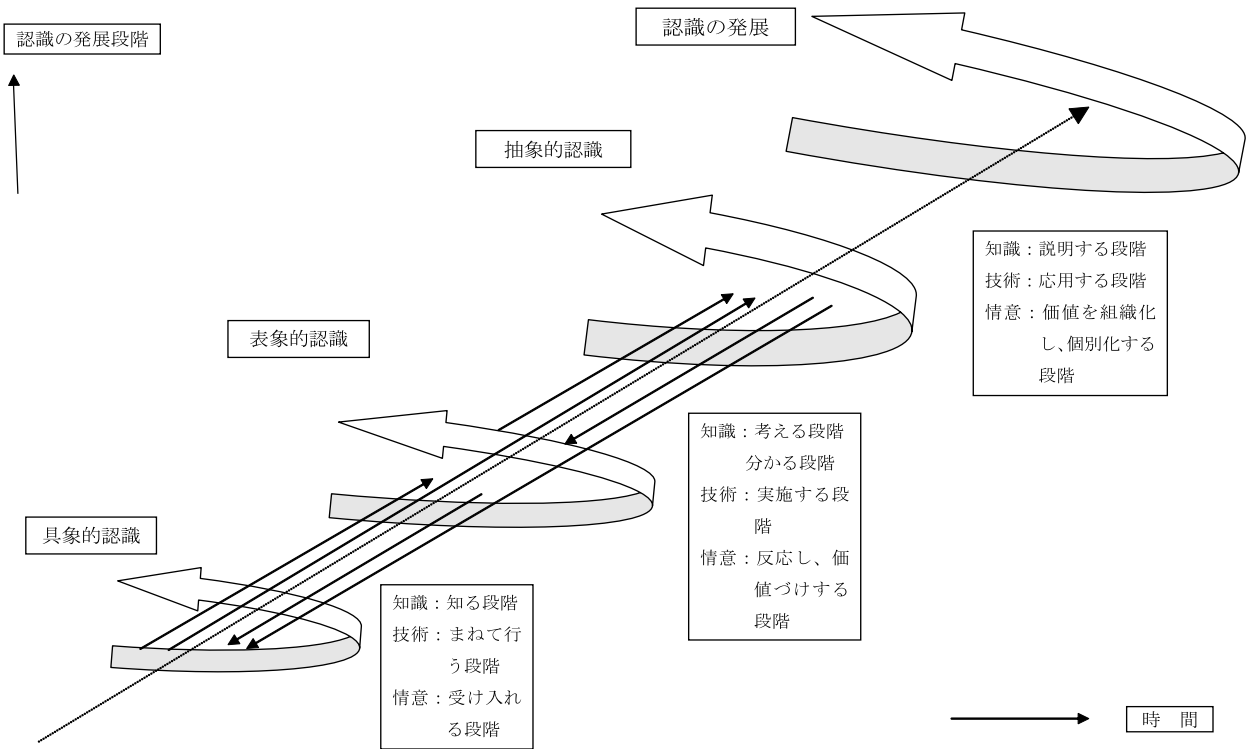


図1 概念枠組み

反転した矢印の大きさは、教育課程に応じて(右上に向かって)増加する知識と学習経験に比例して、「看護」に対する認識が広がっていく状態を示している。さらに、反転した矢印の中の上向き・下向きの矢印は、庄司<sup>14)</sup>のいう「より确实・より充実・より完全」な認識への発展過程で重要な認識運動としての「のほりおり」を表した。

## 5. 倫理的配慮

質問紙調査への協力依頼時に、文書にて、研究の目的、研究への協力は任意であること、質問紙への回答をもって同意が得られたものとする、プライバシーの保護ならびに研究対象者への情報開示、データは研究関係者のみが取り扱うこと、データ処理の際、個人が特定されることはないこと、研究結果を本学の紀要等に公表することを説明した。また、研究への協力の如何や質問紙への回答内容は学業の評価とは全く関係のないことも伝えた。

## 結果及び考察

入学時の調査は、前期授業開始初日の平成17年4月11日に、平成17年度看護学科入学生(以下、学生と略す)59名(1名欠席)に、研究協力の依頼文書を配布して、研究目的ならびに倫理的配慮について説明を行った。質問紙の留め置き期間は、4月11日(月)～4月18日(月)であった。

表2 質問紙調査結果

設問	記述内容	全回答数に占める割合
1. 看護は何をめざして行うと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者様の心身の回復とスムーズな社会復帰(3)</li> <li>日本全体の医療環境の向上</li> <li>患者の健康維持と予防</li> <li>人々に安心をもたらす事</li> <li>人々の生活のサポート</li> <li>病気の回復</li> <li>正しい医療知識の普及</li> <li>生命活動維持への手伝い</li> <li>患者に対し、素早く適切な医療行為をすること。</li> <li>患者の不安を取り除き、出来る限り安らぎを与えること。</li> <li>医師が医療行為をしやすいよう、患者の様子の変化をきちんと伝えること。</li> <li>ホスピス患者に対して、出来る限り死への不安を取り除くこと。</li> </ul>	14/121
2. 看護の対象となる人たちはどのような人たちだと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>精神的・肉体的に普段より病んだ人</li> <li>元から身体の機能に異状があるとされた人</li> <li>加齢により体力の落ちた人</li> <li>体や心が弱った人</li> <li>ケガや病気の人達(3)</li> <li>健康であるかないかにかかわらず、不安や心配事を抱えている人達</li> </ul>	13/121

設 問	記 述 内 容	全回答数に占める割合
	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康を損なう何らかのリスク（病気など）をもっている人もしくはもつ可能性のある人</li> <li>傷病者やその家族の人。</li> <li>自立生活が困難な人達</li> <li>心や体に傷を負った人。</li> <li>心に傷があるということで、自殺しようとした人も。</li> </ul>	
3. 看護職はどのような仕事をしますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>特殊な技術により、患者様の健康を取り戻す手助けをする。</li> <li>経済的・専門的な知識を患者様に提供する。</li> <li>精神的な支えとなる。</li> <li>体や心が弱った人のケアをし、社会復帰の手助けをする。</li> <li>医師の仕事の補佐</li> <li>患者の身の回りの世話 (2)</li> <li>患者さんへの看病</li> <li>人々の健康のサポート</li> <li>患者さんの精神的・肉体的なケア</li> <li>注射</li> <li>1の下4件の記述に同じ。</li> </ul>	16/121
4. 看護に必要な技術には、どのようなものがありますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>注射の打ち方 (4)</li> <li>血圧の測り方</li> <li>カルテの読み取り</li> <li>コミュニケーション (2)</li> <li>体の作りや薬の知識をみにつけ実行する力</li> <li>患者の入浴の補佐</li> <li>手術の際の医師の補佐</li> <li>病院で使うような医療器具を使えること</li> <li>患者さんが安心して話せる対話術</li> <li>看護をするための技術</li> <li>専門的な医療技術 (2)</li> <li>迅速な対応</li> <li>冷静な態度</li> <li>医療機器を上手く使いこなすこと。</li> <li>吸引や採血など、手早くきちんと出来ること。</li> <li>医師などのスタッフに正確に患者の様子を伝えられる、話の技術。</li> <li>笑顔：昔入院したとき、看護師さんの笑顔に励まされたから。</li> <li>嘘：余命宣告を受けたことを、患者に悟られることを避けるため。</li> <li>患者の我がままなどに耐える、忍耐。</li> </ul>	24/121

設 問	記 述 内 容	全回答数に占める割合
5. 自分の、看護職としての能力を高めるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>日々のまじめな学習</li> <li>現場での働きにつながるような実習・演習 (2)</li> <li>人とたくさん話すこと (2)</li> <li>知識を身につけること (2)</li> <li>現場により近い環境で実際に学ぶこと</li> <li>基礎知識を理解した後、実践的な勉強をする。</li> <li>多くの経験をする</li> <li>いろいろな人との交流 (2)</li> <li>専門技術の修得、患者なりきり実習。</li> <li>いろいろな人と出会い、お互いを理解しあうこと。</li> <li>チーム医療だから、医師との連携プレー実習。</li> <li>患者の気持ちが分かるよう</li> </ul>	16/121
6. 看護の対象とより良い人間関係を作るためにはどのようなことが必要だと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>その人の家庭の状況や人となりをより細かく知る。</li> <li>話を聞く力を養い、コミュニケーションをとる。</li> <li>相手の気持ちを理解しようと努力すること。</li> <li>話をする機会を出来るだけ多く持つこと</li> <li>話を聞いてあげること</li> <li>相手を「〇〇という病気にかかっている～さん」ではなく、ただ「～さん」と個人を大切にすること</li> <li>相手への理解 (2)</li> <li>しゃべる</li> <li>患者に対して行う医療行為が、どれだけ患者に不安を与えるか（例えば吸引）、出来る限り想像すること。</li> <li>患者の不満に出来る限り気づいてやり、それとなく解消してやること。（例えば枕の高さ。自分の経験から、合わなくても言い出しづらいから）。</li> </ul>	11/121
7. 看護は、社会のどのような場所で行われると思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>病院 (7)</li> <li>学校 (2)</li> <li>介護施設 (2)</li> <li>老人ホーム (3)</li> <li>デイケアセンター</li> <li>保健所</li> <li>養護施設</li> <li>日常生活のすべての場で</li> <li>自宅（在宅看護） (2)</li> <li>人々の生活の中に密接にかかわれる場所</li> <li>私たちの身のまわり</li> <li>地域</li> <li>人のいるところならどこでも。</li> <li>診療所</li> <li>ホスピス</li> <li>障害者施設</li> </ul>	27/121

本調査の結果、59名の学生のうち9名から回答を得た。質問紙の回収率は約15%であった。9名の学生から121の記述が得られた。各設問に対する記述内容をまとめ、次に、複数の研究者で分析方法にしたがい、分類カテゴリーに振り分け、それぞれについて考察を加えた。「看護」に関する7項目の設問に対する学生の記述を、加工しないでまとめたものが表2である。表の中、記述内容の欄の( )は同一回答数を表している。

### 1. 「看護」に関する知識

「看護」に関する7項目の設問のうち、「看護」に必要な技術(24/121)と「看護」が行われる場(27/121)に関する回答が多かった。これは、学生のレディネスとして、入学以前の「看護」に関する情報や自己の患者体験等から得られた漠然とした知識のうち、この2

項目が自らの体験を裏づけとして具体的に記述することが可能な項目であったからだと考えられる。

言うまでもなく、この時期の学生は、「看護」及びその関連領域に関する知識はほとんどない状態である。したがって、専門用語に対する知識もなく、今回の設問が示す意味は、本調査をした時点での、各学生の文章読解能力にまかされている事になる。記述内容のうち、「看護」に必要な看護技術をたずねた設問4では、「迅速な対応」「冷静な態度」「笑顔」「嘘」「忍耐」などがあがり、学生の回答と設問が求める回答に齟齬がみられた。このような傾向は、設問1の回答である「日本全体の医療環境の向上」「正しい医療知識の普及」や設問3の回答である「人々の健康のサポート」にもみられた。このような齟齬は、設問文に対する文章読解能力のみならず、設問に関する正しい知識不足が影

表3 カテゴリー別分類表

カテゴリー	サブカテゴリー	特 定 シ ン ボ ル	データ数	※表3/ 表2
1 看護の目的	健康に関するニーズの充足	健康の回復・維持・増進、疾病の予防	8	11/14
		生活の質の回復：もとの生き方に戻る、健康快適な生活、社会復帰	2	
		対象の幸福、安らかな死への援助、苦痛の緩和	1	
2 看護の対象	すべての人々	身体的・精神的に問題を抱えている人：病気やケガを抱えている人、病気になりそうな人	9	11/13
		援助を必要とする人：健康を願う人、家族が援助を望む人、生活に支障がある人、対象の家族	2	
		健康な人、地域の人		
3 看護の役割・機能	身体的援助	排泄のケア、清潔のケア、環境調整、身体の状態の把握	4	13/16
	精神的援助	思いやり、心のケア、心の状態の把握、観察、励ます、認める、支援する	5	
	教育・指導	対象の自立のための知識・技能の伝達、療養上のアドバイス	2	
	物理的・化学的・社会的環境調整	医師や医療関係者との連携、家族への配慮	2	
4 看護に必要な技術	コミュニケーション技術	*具体的な技術項目が該当する。	4	17/24
	日常生活援助技術	〃	1	
	診療に伴う援助技術 (観察・測定)の技術	〃	12	
	教育・指導技術	〃		
5 看護専門職としての自己成長	看護専門職としての知識	勉強して専門的な知識を得る	3	16/16
	看護専門職としての技術	実践的な技術を身につける、正確な技術を身につける	7	
	人間性	社会的な視野を広げる	3	
	経験	経験をつむ、経験に対する積極的な姿勢	3	
6 看護の対象との人間関係	対象の尊重	個人として尊重する、対象の権利を尊重する	1	11/11
	対象の理解	対象のことをよく知る、対象を理解しようと努力する、対象の立場への変換	5	
	相互交流	良い聞き手になる、対象の思いの表出を促すように関わる、話す機会を多くもつ	5	
7 看護実践の場	対象がいる場 社会のあらゆる場所	自宅・家庭、病院、学校、老人保健施設、保健所、養護施設、障害者施設	27	27/27
		地域、会社	T 106	106/121

響を及ぼしたのではないかと考えられる。庄司が「認識＝思考＋知識」<sup>15)</sup>と表しているように、「看護」に関する専門知識がないこの時点では、設問を正しく理解できなかった学生がいたことも当然のことであり、このような回答も「看護」に対する認識の発展の、前段階として捉えうると考えられる。

## 2. 「看護」に対する認識

次に、現時点での「看護」に対する認識の実態を把握するために、分析方法にしたがって、複数の研究者で、表1のカテゴリー別に学生の記述(データ)を振り分けて、データ数をまとめたものが表3である。データで、特定シンボルに該当しないものは除外し、二つ以上の特定シンボルを含むものは、特定シンボルの数をデータ数として計上した。表の右の欄は、表2の記述件数に対する表3のデータ数の割合を示している。

表3から言えることは、表2に比して、データ数が減少していることである。それは、まず、前述したような、設問が求める回答と齟齬のある学生の回答はデータ化されなかったからである。次に、表1のカテゴリーの細分化と特定シンボルの対応表は、看護の専門知識をもとに、特定シンボルでは具象的に表現し、サブカテゴリーでは、可能なかぎり抽象的に表現しているため、特定シンボルとサブカテゴリーの両方に該当しない表現が除外されたからである。

認識の表現である記述内容のみをみると、いずれの設問も特定シンボルに振り分けられたデータが多く、具象的な表現がなされていると言える。具象的な表現の段階は、庄司<sup>16)</sup>によれば、認識の段階としては素朴的段階(第一段階)であり、認識の発展という視点からみれば、認識の対象を「感覚的・具象的・個別的・経験的・体感的」<sup>17)</sup>にしか捉えていない段階と考えられ、概念枠組み(図1)の左下の反転した矢印で示している段階である。今後、学生たちの「看護」に対する「ヨリ確実・ヨリ充実・ヨリ完全」な認識への発展のために、まず、学生たちが考えながら、「看護」および関連領域の正しい知識を身につけられるように関わっていく必要がある。

## 謝 辞

本質問紙調査にご協力いただきました、E大学看護学科平成17年度入学生の皆様、本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

## 脚 注

- 1) データベース医中誌WEB(データ更新2005/07/01 13号データ)を、「看護教育」「看護」「認知or認識」をキーワードとして検索すると、2000-2005年で758件の文献が検出された。
- 2) 山内らの報告(引用文献1))のみ、短期大学の看護学生を対象に、1～3年の各年次に、1回ずつ「看護認知」の変化に関する質問紙調査を行っていた。
- 3) 内容分析でいう特定シンボルは、一般的には「語」を指すが、本研究では、設問に対する解答の記述の性質上、分析単位である「文」も配置した。

## 引用文献

- 1) 山内葉月(1997)：看護意識の啓発に関する研究 第4報—短大看護学生の看護認知の変化、入学から卒業まで—、熊本大学医療技術短期大学部紀要, 7, 1-10.
- 2) 渡邊裕美, 杉山敏子他(1996)：看護学生の卒業時における「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージの変化—年次と比較して—、東北大学医療技術短期大学部紀要, 5, 141-148.
- 3) 前田ひとみ, 永田まなみ(1998)：看護学生の看護概念の形成に関する研究(1)—「人間」の概念の変容—、熊本大学医療技術短期大学部紀要, 8, 17-27.
- 4) 立石有紀, 岩本真紀他(2002)：看護学生の看護観の形成過程—看護学概説, 看護理論の科目前後における看護観の変化から—、香川医科大学看護学雑誌, 6, 63-67.
- 5) 田村房子(2000)：臨地実習における看護学生の看護者としての認識への発展過程の構造、千葉看護学会誌, 6(2), 47-53.
- 6) 和泉春美, 山下満子(2003)：学生の看護観の育ちと指導上の課題(第1報)—基礎看護実習前後のレポート分析から—、京都市立看護短期大学紀要, 28, 71-79.
- 7) 前田ひとみ, 永田まなみ(2000)：臨地実習が看護学生の看護観に及ぼす影響、熊本大学医療技術短期大学部紀要, 10, 11-19.
- 8) 相原ひろみ, 酒井淳子, 徳永なみじ他(2004)：看護系大学生の看護に関する認識の変化—第一報 入学初期における学生の看護に関する捉え方—、愛媛県立医療技術大学紀要, 1, 73-79.
- 9) 波多野梗子(2004)：基礎看護学〔1〕看護学概論, 医学書院.
- 10) 松木光子(2001)：看護学概論, 廣川書店.
- 11) 橋元良明(1998)：メッセージ分析, 人間科学『研究

法ハンドブック』, 高橋順一, 渡辺文夫, 大淵憲一  
他編著, pp.75-86.

- 12) 庄司和晃(1979): 仮説実験授業と認識の理論,  
pp.153-179, 季節社.
- 13) 戸坂 潤(1989): 認識論, pp.8-27, 青木書店.
- 14) 前掲書<sup>10)</sup>, p157.
- 15) 前掲書<sup>10)</sup>, p153.
- 16) 前掲書<sup>10)</sup>, p154.
- 17) 前掲書<sup>10)</sup>, p155.

---

## 要 旨

看護学生が, 看護学を学ぶ成果として, 「看護」に対する, 看護の専門家を目指すものとしての独自の認識をもつことは, 非常に重要なことである。

そこで, この度, 平成17年度E大学看護学科の入学生(以下, 学生)を対象に, 「看護」に対する認識の発展の実態を把握するために, カリキュラムの進度に沿って縦断的調査を行うこととした。第1回目の入学時の調査では, 9名の学生(質問紙回収率15%)から121の記述が得られた。

その結果, この時点の学生には, 「看護」に対する認識に先立つ「看護」およびその関連領域の正しい知識がほとんどないため, 質問紙の設問の意味が正しく理解できていないという状況がみられた。また, 記述内容を分析すると, すべての記述が, 認識の発展の第一段階である, 認識の対象を具象的に捉えたものであった。